2　桂川・相模川流域シンポジウム『川は誰のものか』

（報告者：岡田　一慶）

■　開催趣旨

「川は誰のものか」は作家の野田知佑氏から相模川の再生を願って、1990年に私達に送られた言葉だ。

茂倉沢（群馬・みなかみ町）にある治山ダムは平成21年11月30日に撤去が完了した。全国初の治山ダム撤去となり、森林や生態系本来の姿を回復させる試みが行われている。今回は河原でキャンプしながら、参加者が交流し、このダム撤去の意味を考え、相模川の未来を語るシンポジウムだ。

■　開催概要

・開催日時：９月25日(土)、26日(日)
・場　　所：相模川三川合流地点の河原
・参 加 者：80名

■　準備の開始

「川は誰のものかキャンプインシンポジウム」の準備は、５月の「アースディ」から始まった。

会場の代々木公園は参加者であふれていた。出展ブースだけでも大変な数なので、川関係のブースを回ってシンポジウムへの参加を呼びかけた。参加者にもリーフレットを手渡して呼びかけたが、お祭り的雰囲気の中でほとんど埋没していた。1,000枚のリーフレットでは残念ながら手応えはあまりなかった。

６月には開催場所の下見、河川の一時使用届け提出、消防署への「火事とまぎらわしい焚き火の届け」、流域自治体への広報掲載依頼、などの準備が続いた。メディアへの掲載依頼では牧島さんから依頼先の一覧表を教えてもらい、ずいぶん助かった。掲載依頼文の作成、郵送等は倉重さんが担当した。全体の企画の検討、運営の中心は相模川キャンプインシンポジウムが担当した。河原を会場としたシンポジウムは経験が必要だからだ。

■　会場や出演者の手配

会場は相模川三川合流地点右岸側の河原。１部は焚き火トークとミニコンサート。２部は焚き火を囲んでの交流会とキャンプ、翌日のカヌー講習会という内容だ。焚き火トークではたくさんの薪が必要だが、建築廃材を燃やすことは廃棄物処理法に抵触するので、有価物としての薪の確保に配慮した。これは倉橋さんが手配してくれた。焚き火は河原で直に燃やすと河原が黒く焦げてしまうので、ドラムカンを二つ割にして、その上で焚き火をすることにした。当日河原で、ディスクグラインダーで火花を散らしながら、ドラム缶を切っていたのは峯谷さんだ。焚き火トークの講師やパネラーの方に出演要請の連絡をとり始めたのも、６月頃からだった。この企画でどうしても出演してほしい人たちがいた。ぽやぽやバンドだ。出演交渉はぽやぽやバンドと以前から交遊のある氏家さんが担当した。氏家さんにはカヌー講習会で使う子供用の格安のライフジャケットを購入したり、末松さんと一緒にステージ用の横断幕を夜遅くまで作ってもらった。当日の舞台はしっかりしたものが必要だった。雨の場合を考えて、音響設備が雨で濡れることを防ぐ考慮もしなければならなかった。早川さんの友人である柳瀬さんが組み立て式のステージをもっていることがわかり、ステージの設営

を手伝うことを条件に格安で借りることができた。実際にでき上がったステージは水平のレベルをきっちりと測った立派なものだった。音響設備を雨から防ぐテントは厚木市の霜島さんの協力で借りることができた。テントはレンタルも可能だが、一週間単位のレンタルで非常に割高になる。霜島さんは会場に隣接する運動公園のトイレを使うことが出来るように手配したり、近隣自治会への挨拶に同行してくれた。また花火大会との同時開催問題でもたいへんお世話になった。相模原市の桑原さんは環境情報センターからテントを借用できるようにしてもらった。

■　スタードーム

サプライズ企画も用意した。直径が８ｍ、円周24m、高さ４ｍの「スタードーム」を造ることだ。完成すれば、感動的なものになることはまちがいなかった。スタードームの企画、製作は早川さんが担当した。当初は世界最大級の円周48m規模を考えていたようだったが、既に他の団体に造られてしまったので、比較的中規模のスタードームに変更した。骨組みは太いモウソウ竹を六割にした竹である。竹は倉橋さんが主宰する鳩川縄文・谷戸の会のフィールドである鳩川の岸辺に群生する太い竹を使った。早川さん、峯谷さん、阿部さん、重倉さんたちが15m以上もある竹を急な斜面から切り出した。それを広い場所まで運んで竹割り工具を使って六つ割にした上で、節を取り除き設計図に従って穴をあけていく。早川さんの頭の中には設計図が入っていて、順調に作業は進んでいった。面白い体験だが結構きつい作業だった。

■　開催直前のトラブル

開催が近くなった９月になって、厚木市の霜島さんから「団十郎」と言う団体が同じ場所で同じ時間に本格的な大型の花火大会を計画している、という情報が寄せられた。花火大会の問い合わせ担当者に連絡すると、「河川の一時使用届け」は提出しているので、予定通り花火大会を行いたい。半径110mは火薬類取締法による立ち入り禁止区域に設定する。」とかなり強気の姿勢が感じられた。

私たちは他の団体と競合しないように、かなり早めの３ケ月以上前の６月に河原の一時使用届けを出して、場所が競合しないように配慮したつもりだった。「団十郎」の届け出は直前の９月中旬だった。当然、わたしたちに一定のアドバンテージがあると思われた。河原の一時使用届けには場所の地図の添付が必要で、場所が競合するかどうかを事前チェックできる。場所が競合する場合は、後から計画した団体には計画の変更を求めることは当然可能であると思われた。しかし、厚木土木の許認可の対応は「河川の一時使用では使用者同士が話し合って決めてください。指導はできません。」というものだった。事前に霜島さんから情報が入らなければ、当日まで花火大会があることは知らされず、大きな混乱を招いた可能性があった。特に大きな花火大会の場合は引火等の危険性もあり、事故が起きる可能性もあるため、当事者間の調整だけに委ねるのではなく、一時使用届けの段階で河川管理者が調整することが求められる。大きな花火大会の場合、同じ時間、同じ場所に他の団体が河原を使用することなど聞いたことも、見たこともない。相模川の河川管理者は花火大会と他団体とのダブルブッキングに注意が必要と思われる。

結果的には開催日直前に混乱が回避され、問題なくシンポジウムは行われた。

■　シンポジウム当日

シンポジウム前夜は台風が関東に接近し、開催断念もあり得た状況だったが、当日は運良く台風一過の秋晴れになった。

9月25日の河原での準備は、遅れてやってきた資材を満載したトラックの到着で本格的に始まった。テントの組み立て、舞台の設営、スタードームの組み立て、受付の設営、豚汁の準備、音響のマイクテストなど順調に整っていった。

スタードームの設営は早川さんが中心になって大浦さん、細田さん、鈴木さん、霜島さん、桑原さん、峯谷さん、天内さん、牧島さん、中門さん達が作り上げた。

当日の参加者には豚汁を提供することになっていた。材料の用意などの調理はすべて、倉橋さん、市原さん、畠山さん、阿部さんと鳩川縄文・谷戸の会の人たちが担当してくれた。

「ケ」と「ハレ」という言葉がある。諸説あるようだが、「ケ」は日常、「ハレ」は特別な日という意味だったように思う。流域協議会の普段の活動は調査やクリーンキャンペーン、学習会などどちらかといえば、コツコツ積み上げていく「ケ」の活動のように思われる。そこで培われた経験やエネルギーをいろんな人々と分かち合い、交流することの楽しさを感じる「ハレ」の場がキャンプインシンポジウムではないだろうか。私はこのシンポジウムが流域協議会の人々が交流する「ハレ」の日になることを願った。

■　シンポジウム

ステージでは「アクア」の演奏が始まった。女性ボーカルの透明感のあるやさしい声が夕闇に浸透する。

「焚き火トーク」では講師のＮＰＯ法人日本自然保護協会　出島誠一氏が、ダム撤去に至る経緯を丁寧に解説し、相模川流域でも、撤去できる状態の治山ダムが必ずあるはずだと力強く語った。

【出島氏の講演】

「河川整備計画ウォッチングトーク」では日本野鳥の会神奈川県支部　石井隆氏が、野鳥保護の視点で河原の生態系の保全を訴えた。ＮＰＯ法人神奈川県自然保護協会　青砥航次氏は、川の洪水のかく乱作用も含めた変化が川の生態系のバランスを保地し、川が川らしい姿を形成していることから、個別の場所の保全だけでは十分ではないことを指摘した。

【石井氏の講演】

相模川キャンプインシンポジウム　岡田は、河川敷の利用の実体が、相模川の自然環境と開発の調和を目指した相模川環境管理計画から乖離していることを指摘した。人工的利用形態が進み過ぎて、貴重な相模川の自然環境が損なわれている。グラウンドなどの運動場を整備できないエリアに、他目的広場と言う名称でグラウンドが整備され、人工裸地がひろがっている河原もある。河原は余っている広い空間ではない。河原は河原でしか成立しない生態系の基盤的存在でかけがえのないものだ。相模川の自然環境と調和のとれた、川原でしかできない利用の方法に見直すことが求められていると説明した。

今回は「花火大会」がほぼ同じ河原で開催されることになり、花火の打ち上げ時間等の調整が必要だった。30 分の休憩時間をとり、その間に大きな花火が何発も打ち上げられた。調整は苦労したが、当日はまるで私たちのシンポジウム開催を祝福するように豪快に花火が打ち上げられた。

「ぽやぽやバンド」の演奏は、豪快に打ち上げられる花火を演奏の一部に見事に取り込んで、パワフルに始まった。

山梨県から参加した若者たちが、参加者を巻き込んで楽しそうに、フォークダンスのように、盆踊りのように、輪になって踊っている。

１部のプログラムが終了した後、自然発生的にプログラムにはない、スタードームでの「アクア」のコンサートが始まった。スタードームは夜の河原に浮かび上がり、ギターの調べにボーカルの声が美しく響いた。雨が降った時の緊急避難用や、テントを持参していない人が宿泊できるために用意されたスタードームだったが、屋外のコンサートホールとしてもふさわしい。

■　カヌー講習会

翌日は朝から気持ちのよい秋晴れになり、座架依橋下でカヌー講習会が行われた。

講習会で練習した後、座架依橋から会場の三川合流地点まで、参加者と共にカヌーツーリングを予定していたが、川にはたくさんのアユ釣り師がいたのでカヌーツーリングは中止になった。しかし、講習会は時間の余裕ができて、結果的にはよかった。小学生の男の子は、お父さんと一緒にカヌーに乗っていたが、「僕一人で乗りたい」と言って、カヌーに挑戦している。カヌーは船体が軽いので、小学生でも一人で操作できる。子供の表情が自信に満ちて、生き生きとしている。峯谷さんは何でもない所で見事に沈（沈没）したが、半ば水没したカヌーはまるで潜水艦のようだ。ずぶ濡れになった峯谷さんは震えながら、「ああ気持ちいいね」と実に愉しそうだ。

講習会も無事終了した。心地よい疲れを感じながら会場の撤収、清掃を残ったメンバーで行った。

■　シンポジウムを振り返って

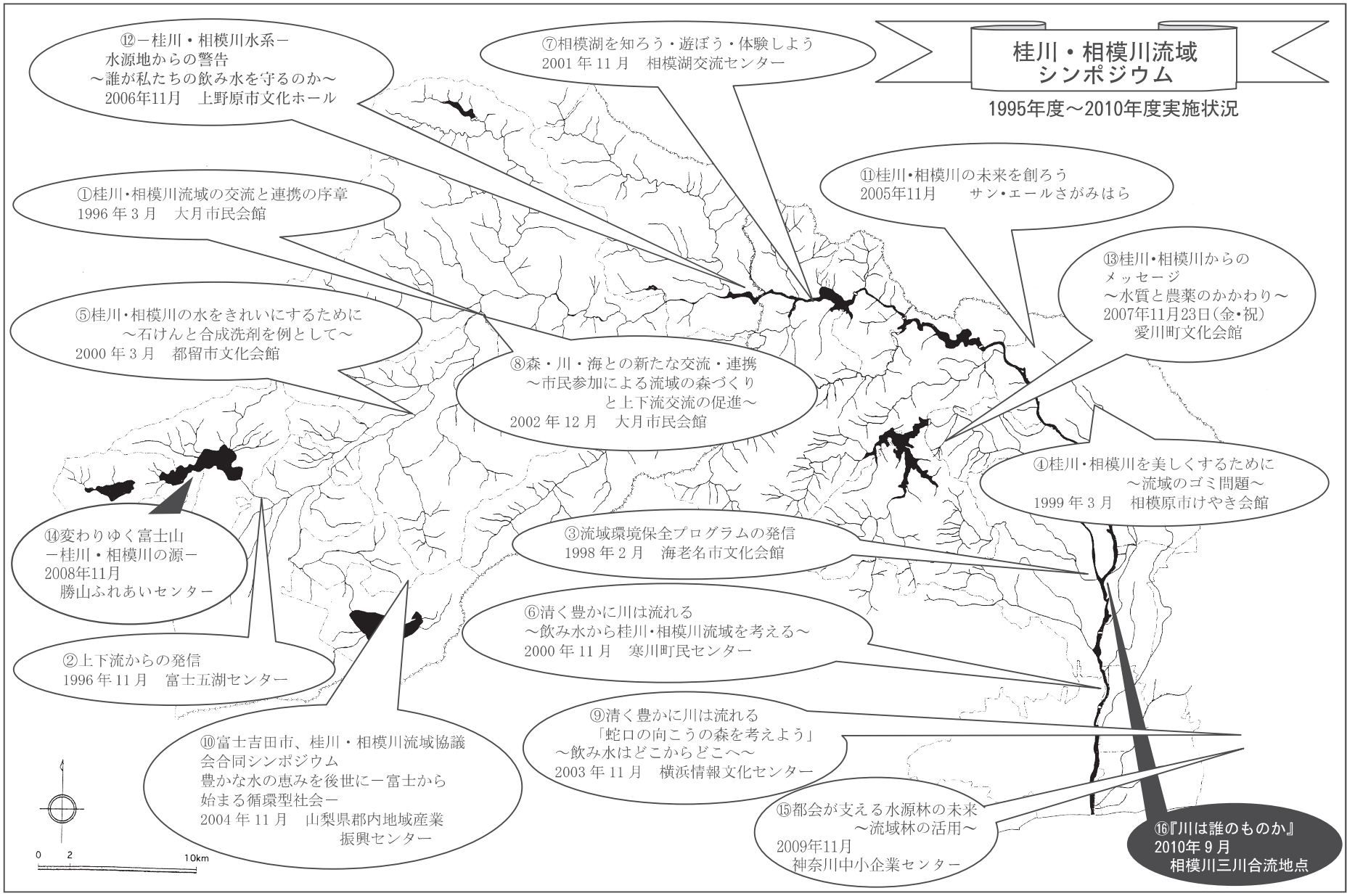
しかし課題も見つかった。この場所は、コンサートやシンポジウムを行うには都市化し過ぎている。近隣の住民には申し訳ない気持ちが残った。

今回の企画で一番の成果は人と人との繋がりだろう。流域協議会に加入している会員だけでなく、実に様々な人たちが協力してくれた。いろんな人々がこのシンポジウムの準備に関わり、そして手作りの「キャンプインシンポジウム」ができ上がった。いろんな方の協力がなければこの交流シンポジウムにはならなかっただろう。

◎　参加しての感想　◎

（報告者：厚木市河川ふれあい課）

相模川三川合流点河川敷は、６月１日の鮎漁解禁に始まり、８月の鮎まつり大花火大会の打上会場に利用されるなど、年間を通じて市民や市外からの行楽客などに利用されている憩いの空間です。周辺の市街地は、江戸時代に小江戸と呼ばれた厚木宿であり、相模川の水運により発展し、現在も相模川沿いで唯一中心市街地に面し、鉄道等の公共交通機関を利用して気軽に訪れることが出来る地理的特性を持っています。また、昨年は首都圏初の開催となる「Ｂ－１グランプリ in 厚木」の会場として、全国各地から多くの方々が訪れた場所でもあります。現在、厚木市では三川合流点地区における河川空間の利用の在り方を検討しており、自然との触れ合いやレクリエーションの場として、今後も多くの方々に訪れていただけるよう河川敷の環境保全と有効利用を図ってまいります。厚木市を訪れた際には、ぜひとも相模川三川合流点へ足を運んでいただければ幸いです。


桂川・相模川流域
シンポジウム
1995年度～2010年度実施状況
⑫－桂川・相模川水系－
水源地からの警告
～誰が私たちの飲み水を守るのか～
2006年11月　上野原市文化ホール
⑦相模湖を知ろう・遊ぼう・体験しよう
2001 年 11 月　相模湖交流センター
⑪桂川・相模川の未来を創ろう
2005年11月　サン・エールさがみはら
①桂川・相模川流域の交流と連携の序章
1996 年 3 月　大月市民会館
⑬桂川・相模川からの
メッセージ
～水質と農薬のかかわり～
2007年11月23日（金・祝）
愛川町文化会館
⑤桂川・相模川の水をきれいにするために
～石けんと合成洗剤を例として～
2000 年 3 月　都留市文化会館
⑧森・川・海との新たな交流・連携
～市民参加による流域の森づくり
と上下流交流の促進～
2002 年 12 月　大月市民会館
④桂川・相模川を美しくするために
～流域のゴミ問題～
1999 年 3 月　相模原市けやき会館
⑭変わりゆく富士山
－桂川・相模川の源－
2008年11月
勝山ふれあいセンター
③流域環境保全プログラムの発信
1998 年 2 月　海老名市文化会館
⑥清く豊かに川は流れる
～飲み水から桂川・相模川流域を考える～
2000 年 11 月　寒川町民センター
②上下流からの発信
1996 年 11 月　富士五湖センター
⑩富士吉田市、桂川・相模川流域協議
会合同シンポジウム
豊かな水の恵みを後世に－富士から
始まる循環型社会－
2004 年 11 月　山梨県郡内地域産業
振興センター
⑨清く豊かに川は流れる
「蛇口の向こうの森を考えよう」
～飲み水はどこからどこへ～
2003 年 11 月　横浜情報文化センター
⑮都会が支える水源林の未来
～流域林の活用～
2009年11月
神奈川中小企業センター
⑯『川は誰のものか』
2010年 9 月
相模川三川合流地点
0
2
10km